

玉藻(裳) 創刊号目次

紫の匂へる妹

——「妹」と「妻」との対応について——

瀬古 確 (1)

接続からみた枕詞

——土地に冠するもの——

松永多恵子 (5)

「春の鳥」とワーズワース

鈴木二三雄 (13)

『荒野』時代の武者小路實篤

遠藤 祐 (19)

彙報

編集後記

(34) (33)

玉

裳

創刊号

編 集 後 記

◆天候不順とはいえ、すでに研究室窓外の桜もほころびる頃となった。春は目の前にある——という実感に浸りつつ、このあとがきを記すことのできるのは、大きなよろこびである。研究誌をもちたい、それは学会発足以来の私達の宿願であった。たとえ量において小さくとも、各自の日々の蓄積をひとつの形に結集することは、生まれつきの名にふさわしい内実を備えたものに生長させるために、なくてはならぬ核だと信じながらである。しかし気はあせりながらもなかなかその願いを実現できなかった。ふりかえてみると、まことに事の多い一年だったと思う。何か河原で小石をひとつひとつ積み上げている、そんな感じの研究室生活であった。とはいうものの、学会の席に連なるもの一人としていえば、忙しさは、やはり、言いのがれにすぎぬ。創刊のよろこびとともに、私達の努力が必ずしも十分ではなかったことを、ここに率直に反

省したい。

◆第一号には四編の論文を集めた。瀬古教授の論は、多年手がけてこられた「万葉集」研究の一端である。短かくはあっても滋味にとむもの。松永多恵子氏の「接続からみた枕詞」は、人麿・赤人短歌における枕詞の用法を、その作歌態度との関連において綿密に分析している。鈴木講師は、独歩におけるワーズワース撰取の問題を、「春の鳥」を中心に考察された。昨秋開かれた比較文学会の全国大会における発表に補筆したもので、興味深い論題である。速藤助教授の『荒野』論は、武者小路の最初の文集を分析して、その人間主義Vの中核に迫ろうとしている。その要項は本年三月のキリスト教と文学研究会例会で発表された。創刊の号としてはささやかに過ぎるかもしれないが、学会の規模も小さく、経費の関係もあって、止むをえない。しかしはなやかな空虚ではなく、ささやかな充実を求めるのが研究誌の常であるとすれば、これはこれでよいと思う。要は自分の本当に書きたいものを書くことだ。いたずらに

右顧左眊すべきではない。『玉藻』の今後、理解ある、きびしい眼を注いでいたいただきたい。なお瀬古教授の「万葉集」研究の成果は、やがて一本として上梓される運びにある。

玉 藻(裳) 創刊号

昭和四十一年三月二十日印刷

昭和四十一年三月二十五日発行

編輯兼 フェリス女学院大学国文学会
発行人 代表者 瀬 古 確

印刷人 井 口 秀 昭

横浜市中区山手町三七

発行所

フェリス女学院大学
国 文 学 会